「知って始まること」
隠岐の島町立西郷中学校　一年　　湊琴葉

「あの子、隠キャじゃない。」

あれは、小学校４年生の夏の出来事でした。休み時間に友達と図書館で本を読んでいると、ふと、となりから聞こえてきました。直接言われた訳ではなかったのですが、あきらかに私のことを言っていました。私はとても悲しい気持ちになりました。自分のことを「隠キャ」だと思い込むようになり、「死にたい」という気持ちになった時もありました。「隠キャ」と言われて、しばらくの間自分の殻に閉じこもっていました。しかし、６年生の時に思い切って自分の殻を破っていこうと思いました。イベントに参加したり、今まであまり話したことがなかった同級生と一緒に遊んだり、ふるまい方を少し変えてみたりしました。すると、友達もだんだん増えていき、「死にたい」という気持ちも少しずつ薄れてきました。「隠キャ」という言葉を気にせずくらしていました。

もちろん、このようなことは立派ないじめです。人々は「隠キャ」と「陽キャ」などの極端に二分化されたカテゴリーに自分や他人を押し込めようとします。そして、差別し分類します。言った人はおもしろ半分で言ったとしても、言われた人は一生の傷を負うかもしれません。私の場合は一、二年で立ち直れましたが、人によっては立ち直れない人もいます。そもそも、「隠キャ」と「陽キャ」という言葉は必要なのでしょうか。「隠キャ」と「陽キャ」という言葉で差別するのではなく、まずは「相手を知ること」から始めませんか。

「相手を知ること」とは、相手をある一面だけを見て判断するのではなく、いろいろな面に目を向けるということです。例えば、仲の良い同級生といる時の私や家にいる時の私、先生と話している時の私、同級生の男子と話している時の私では、その時々で姿も態度も違うと思います。つまり、場面によって人はいろいろなキャラクターになり得るのです。相手を知ると、信頼を生むことができます。そして、その人の知らなかった一面を見ることができるのです。

さて、みなさんは、なぜ「隠キャ」と言う言葉を使って差別する人がいるのだと思いますか。調べてみると、批判はいつも少数派の人たちに集まることが理由のようです。例えば、芸能人のスキャンダルが批判されるのも、大衆が信じる常識とは異なった行いをしている、すなわち、少数派だからだそうです。そして、少数派が批判を受ける理由は、多数派が生き延びるためだということです。つまり、「隠キャ」と「陽キャ」とは、不安感の強い外向型の人たちが、その不安を穴埋めするために作った悲しい言葉だったのです。

私たちがすべきことは、自分と似た仲間を増やすために社会を二分化するのではなく、誰もが生きやすい社会にするためにはどうすれば良いのかを考えることなのです。そして私は、すべての人に伝えたいです。差別されている人は、言葉にだまされないで欲しいこと。そして差別している人は、不安に負けて攻撃しないで欲しいことを。そして今、差別されていて「苦しくて死にたい。」と思っている人は、差別をするような人たちのために死のうと

思わないで欲しいです。私は、小学校６年生になって、やっとこのことに気づきました。

最後に私は、もしかしたら「隠キャ」と「陽キャ」という言葉はなくならないかもしれないけれど、他人を二分化された狭いカテゴリーに分類せず、まずは相手のことを知って欲しいということをみなさんに伝えたいです。そして、そのようなことを気にする必要がない社会を目指したいです。そのために、いろんな人と関わり、みんなが自分らしくふるまい、それを認め合えるようにしたいです。そして、これからも私を助け出してくれた友達を大切にして生活していきたいです。